

平成19年12月13日

科学・技術史 受講者 各位

担当 樋口 良之

<http://www.hi-higuchi.com/>

平成19年度 科学・技術史の期末レポートについて

1. レポート課題

課題1. マクロな科学技術の発展過程とミクロな科学技術の発展過程の解説

授業で解説されていたマクロな科学技術の発展過程、ミクロな科学技術の発展過程について、それぞれ図を用いて解説しなさい。

課題2. 事例研究

次の課題の中から一つを選び解説しなさい。

(1) マクロな科学技術の発展過程が成立している史実を一つあげて、発展過程がどのように成立しているかを検証しなさい。

(2) ミクロな科学技術の発展過程が成立している史実を一つあげて、発展過程がどのように成立しているかを検証しなさい。

2. レポートの提出

平成20年1月10日(木)と1月17日(木)のそれぞれ授業終了直後に、授業を行う教室にて担当教員がレポートを受取る。レポートの提出にあたっては、担当教員が、名簿に提出済のチェックをしたのを確認しなさい。チェックが確認されない場合には、レポートが未提出という扱いを受ける場合があるので、十分に注意する。

また、上記の2日間に提出できない場合には、平成20年1月21日から平成20年2月7日までの間に、福島大学金谷川キャンパスS棟2階教務支援グループ執務室前のレポートボックス(樋口専用ポスト)へ投函する。原則として、提出が遅れた場合には、受理しない。十分、計画的に課題を進め、レポートを作成するように注意されたい。提出されたレポートは返却しないので、各自で複写して保存することを推奨する。提出確認などされていない場合、複写したものが保障として機能することもある。

なお、レポート技術の向上を目的に、特別に添削や指導を希望する受講者は、平成20年1月10日(木)と1月17日(木)にレポートを提出し、別途、担当講師へ申し出るものとする。

3. レポートの体裁

レポートの評価では、レポートの体裁が整っていることも評価の対象になっている。以下のレポートの様式についての指示について、十分に注意されたい。

レポートはA4 サイズ縦置きで作成する。A3サイズ用の紙へ記述する方が見やすい場合もあるが、そのような場合には、記述したものを、A4サイズに収まるように折りたたみ、A4サイズのレポートとしてまとめる。ステープラーで閉じたときに、見開きできないような状況にならないように注意する。

レポートは、ボールペン、鉛筆などによる手書きのものでも、パソコンなどを活用したものでもよい。ただし、薄い表記は減点になったり、採点の対象にならない。目安としては、通常の濃さでコピーしたときにはっきりと複写されることが望ましい。

レポートに表紙はつけない。レポートは左上を1箇所ステープラーでとめる。ステープラーで閉じる際の針の位置と角度は、下記のレポート1ページ目のイメージを参照すること。左側中央を基準に2穴のパンチ穴をつくる。授業では、事務用品の貸し出しは行っていないので、レポートにあたって各自の努力で対応すること。また、レポートの構成枚数が多くなり、ステープラーでレポートをとめられないときには、比較的大型のクリップを用いてもかまわない。

レポートには用紙の右上にページ数を付す。例えば、全5ページのレポートであれば、1/5、2/5、3/5、4/5、5/5といったようにページを付す。また、レポートに表紙を付すことを望んでいないため、1ページ目の最初に提出日、提出先、提出者学籍番号と氏名、レポートに適切なタイトルを名付け、記述する。

レポートの記述にあたっては、上下左右の余白を25ミリ程度とり、大きすぎず、小さすぎず、配慮する。また、文字の大きさは、12ポイントを基準とする。行間は、詰めすぎず、広げすぎない。本手引きを目安に作成する。例えば、最初のページは、次のようになる。

— — —最初のページのイメージ例 ここから— — —

1 / 5

平成20年 1月20日

科学・技術史ご担当
准教授 樋口 良之 様

200610A2
科技 史郎

科学・技術史の期末課題レポート
～電灯・電球のミクロな科学技術の発展過程～

1. はじめに

— — —最初のページのイメージ例 ここまで— — —

また、以下の点について配慮する。

- ・レポートをまとめるにあたり、できるだけ図表を多用する。
- ・レポートが作成できたら、必ず精査し、誤字脱字の修正、ロジカルシンキングといった視点に立って、加筆修正を繰り返す、本当に満足のいくレポートに仕上げる努力を行う。
- ・本文中に引用、参考にした書籍、論文、記事などを「文献」として、レポートの最後に記載する。

例：

- (1) 島田, 経営情報システム 改訂版, 日科技連, pp273-282, 2001.
- (2) 一重・樋口・品川, QRコードを用いた感染性廃棄物リアルタイム管理システムの開発, 日本機械学会交通・物流部門大会 TRANSLOG2007, 講演論文集 pp175-179, 2007.

その他、レポート作成者の判断で自由に記述してかまわないが、章、節、項などの区分をしたポイントシステムによって記述する。区分ごとに適切なタイトルを付して記述するなど、理解されやすい表記につとめる。「ビジネス社会に有用な人材となる訓練を兼ねた授業とする」との観点から、ビジネス文書、報告書などを念頭に、レポートを作成する努力を求める。話し言葉ではなく、書き言葉で記述する。